
銃と拳 【第一回 戦闘シーンを書こう】

neoblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃と拳 【第一回 戦闘シーンを書こう】

【Nコード】

N0560S

【作者名】

neoblack

【あらすじ】

【第一回 戦闘シーンを書こう】

謎の招待状を受け取った廷兼朗は、指定された場所へのこのこやってくるが……

字緒廷兼朗 VS 響礼奈。お互い能力なし。はてさてどうなることやら。

(前書き)

クロワッサンさん主催の企画【第一回 戦闘シーンを書こう】の作品です。

戦闘描写だけを描くという潔い、それでいて素敵な企画に参加できて、とてもよい経験となりました。

あとはこれを読んでくれた読者の方が少しでも楽しんでいただければ、私にとっては望外の喜びです。

その日、字緒廷兼朗^{あざおていけんろう}は遭難していた。

手紙で指定されたのは、人里から少し離れた雑木林の只中だった。目印になるランドマークがないため、コンパスと地図を頻りに眺め、今しがた渡ってきた川から位置を割り出していたはずなのだが……。

「ここがこうで、こうだからこう行って……」

独り言ではそれらしいことを言いながら、何がどうなっているのか、さっぱり見当が付いていなかった。山に入るまでは大丈夫だったのだが、一度足を踏み入れると、まるで神隠しにでもあったかのように道を外れ、途端に地図もコンパスも用を成さなくなってしまう。

廷兼朗の実家は和歌山の田舎であり、よく習練でこうした山に入ることがしばしばあった。なので山に入るのは別段苦手ではないはずなのだが、今回はどうやら勝手が違うらしい。

これでは手紙に指定された場所に行くどころか、無事に帰れるかどうかすら危うい。思わず来た道を引き返したくなるが、山で迷った場合、下に降りるのは却って迷うことになる。ここは上を目指して、高い場所から見渡すのが良策だろう。

そうこうしているうちに、小さな川に出た。見るところ上流は遙か上から来ている。これを遡れば、自ずと山の頂上に着くだろう。

「ふああ。いやあ、まいったなあ」

地図もコンパスも利かぬことで少々神経をすり減らした廷兼朗は、小川に寄ってその清水を顔にぶち当てた。

歩き詰めで火照った顔が、気持ちよく冷やされる。とりあえずここで一休みしてから出発することにした廷兼朗は、荷物を降ろして河原に腰を下ろした。

もはや廷兼朗は謎の招待状のことなど意中から失せてしまって、無事に山を降りる算段をつけるので心が占められてしまっていた。

そんな廷兼朗の耳が、鳥の鳴き声や葉擦れの音とは違うものを拾い上げた。硬質でリズムカルなそれは、人間の靴音と見て間違いない。

まもなく対岸に現れたのは、一人の少女だった。年の頃は廷兼朗と同じか、小さいくらいだろう。二房に分けられた左右の髪をふわりと揺らしながら、少女は川の縁まで歩いてくる。

登山客ならば声を掛けて道を尋ねようと考えていた廷兼朗だったが、その時点で背筋に薄ら寒いものを感じていた。

歩いてくる少女の服は、年齢に合わせた可愛らしいスカートやジャケットなのだが、そこかしこに不自然な膨らみが窺える。

無論それは女性的な柔らかい体の起伏ではない。硬く尖った、命を断つ利器が持つ独特の形状と雰囲気である。

それでも巧妙に隠匿されているため、何が何個と具体的に読み取るには至らない。ならば火器銃器、さらにはBC兵器の運用まで視野に入れて対処するべきだろう。

「あなたが、相手ですか？」

廷兼朗が警戒を強めるなか、足元を流れる清流と同等に涼やかな声音で、少女は問いかけてきた。

謎の招待状のことを忘れていた廷兼朗でも、そのように言われれば十分に察しはつく。彼は頷いて、懐に入れておいた手紙を取り出した。

「これが資格、ということですよね」

顔の横に手紙を掲げる廷兼朗に、少女はこくりと首肯する。

「僕は字緒廷兼朗と言います。あなたのお名前、窺ってもいいですか？」

またも少女はその小さな顔をこくと傾けて、

「響、礼奈です。よろしくおねがいします」

丁寧の名乗り上げてくれた。

「それじゃあ、始めましょうか。なにやら制限時間もあるようだし」

廷兼朗は手紙を懷に仕舞い直すと、これみよがしに準備運動を始めた。

始めようと言いながら仕掛けず、むしろ隙を晒して見せたのは、一重に相手の出方を窺つてのことである。そのため体操中も、響の体からは視線を外さない。

あえて先手を譲るのは確かに不利だが、相手がどのような攻撃手段を用いるのか分からないうちに踏み込むのは気が引けた。

大体のストレッチを終えても、響は仕掛けてくる気配がなかった。顔つきからしてあまり活発でない、どこか自我の希薄そうな儚さを帯びていたが、今はその端正な眉をひそめ、困ったような表情を浮かべている。

「どうかしましたか？」

抜け抜けとそんなことを聞いてくる廷兼朗に、ますます響は困惑の色を強めた。

「いえ、あの……そんなに警戒しなくてもいいですよ。いきなりキツくはしないので」

その発言に、廷兼朗は何の含みも無く目を丸めた。どうやら彼の思惑は、すっかり響に筒抜けていたらしい。

「へえ。程よく加減をしてくれると、そう取っていいんですか」

「あ、はい。字緒さんは手ぶらみたいだし、それくらいは大丈夫です」

それくらい――。廷兼朗は響の言葉を小さく反芻した。その言葉の真実味は、何の邪気も孕まない彼女の顔を見れば瞭然だ。

響は本気で、この戦いにおいて程よく加減し、廷兼朗との戦闘を程よく演出し、程よく円満に終らせたいと考えているようだ。

元より性根が優しいのだろう。するりと言葉が出てきたところから窺うに、無理をしての発言ではなく、心からのものらしい。

ならば是非もない。せっかく送られてきたものを無碍に返すのは、廷兼朗の性情に反する。きっちり、余すところなく受け取るだけ

の懐はある。

「では、お手柔らかに」

それでも返したくなかったなら、こちらは熨斗を付けておけばいい。

廷兼朗は、小川に足を入れた。ゆっくりと、水の冷たさを確かめるように。

普通に歩くよりも遅いそれは無論のこと、廷兼朗の響に対する意趣返しであり、戦略でもある。いつでも仕掛けられそうなほど遅い歩みは、仕掛ける機会を響に試させているのだ。

それでいて緩慢な動きには、廷兼朗の神経が隅々にまで行き届いている。急ぐ必要がないからこそ丁寧な体を動かし、いつ何時、何を仕掛けられようと呼応する準備を整えることが出来ている。

遠間から仕掛けられようと、引き付けてから仕掛けられようと、廷兼朗にさしたる違いはない。既に響が言外に伝えている武器の存在を考慮すれば、どちらにせよ廷兼朗の間合いで仕掛けられることは低いからだ。

ナイフであろうと銃器であろうと、素手より長いことに変わりはない。

もしかすれば『程よい加減』というやつで、接近を許してくれるかもしれない。そうなればむしろ好都合。廷兼朗も程よく、響の体を破壊してあげるだけのことだ。

そんな廷兼朗の淡い期待が、空しくも破れることとなった。

響は廷兼朗と同様の遅さで、後ろに下がっていった。ごろごろと石が敷き詰められた河原で、器用に後退さっている。

その様子に廷兼朗は、むしろ気分を良くしたように笑ってみせた。「加減してくれるんじゃない、なかったのですか？」

「やめました。こういういやらしいことをする人に、加減はいらないでしょう」

いやらしいとはまた、結構な誉め言葉だ。そして先程の発言を苦も無く撤回する潔さ。実に廷兼朗の好むところである。

廷兼朗がようやく小川を渡り終えて、岸へ上がる。そうしている間に、響の背後には鬱蒼とした雑木林が控えていた。

拳も剣も交えることなく、既に経つこと一分。二人の姿は草薙の中に消えていった。

ようやく分かりやすい仕掛けを行なったのは、やはり廷兼朗のほうだった。がさがさと草を打ち鳴らし、響との間合いを潰しに掛かる。

響は下がりながら腰のスカートの中に手を伸ばすと、そこから細長い棒を取り出し、引き抜き様に廷兼朗へ向かって投げ放った。

廷兼朗の短い髪を掠りながら飛び退ったそれが後方の木に刺さり、小気味良い音を立てる。

どうやらスローイングナイフの類らしい。クイックドロウで、しかも両手で同じように投げ放つ技術を見れば、その習練の程がよく知れる。

廷兼朗がさらに身を低ませて、足元の草薙に隠れるほどの位置から響に迫る。

そんな廷兼朗の耳に届く、機械の小さな作動音。

つま先から刃物を突き出し、それで薙ぐような軌道で蹴り込んでくる。軌道上にある草を切り払い、しなやかに廷兼朗の顔面へ迫ってくる。

(これはまた、面白い仕掛けを)

廷兼朗はすかさず左手を伸ばし、蹴りを放っている響の左太腿を鷲づかみにした。

蹴りがその威力を発揮するのは、膝から先の部分である。それ以外に当たったり、押さえられたりすれば、威力が大半奪われてしまう。

女子学生らしい張りのある太腿の感触を楽しむ暇も無く、廷兼朗は親指で太腿の裏を強かに押し込んだ。

肉の付きかけた成長途中の太腿に、廷兼朗の指が深々と刺さり、

無表情だった響の顔つきが俄かに曇った。

後稲妻と呼ばれるツボを押し、一瞬だけ体を痺れさせたのだ。よしんばこれで押し倒して寝技に持ち込みたかったが、響は未だ絶妙にバランスを保っている。

廷兼朗が残りの脚を払おうと右手を振るったとき、それに先んじて響の左足が翻った。

不安定な状態なのだから、残りの脚を狙うのは真っ当だ。それを読まれるのも、至極当然と言えるだろう。

廷兼朗は振るった右手を戻さず、そのままくると軌道を変えて顎下へと向かわせる。

天羽根流の基本当身、喉断ち。伸展した腕の振り打ちを顎先に擦過させ、脳震盪を確実に誘発せしめる技法である。

両足で蹴り込んだあとの不安定な態勢ながら、響はさっと両腕で顔の左側を覆った。その類稀なバランス感覚に舌を巻きつつも、廷兼朗は一切加減などせず右腕の振り打ちを叩きつけた。

渾身の限り打ち付けた右の手刀は、小柄な響の体を二転三転させて後方へと突き飛ばした。

「ぐうっ」

むしろ呻いたのは、廷兼朗のほうだった。今しがた打った右の手が、ぶるりと震えている。

響の防御を打ち抜いたとき、廷兼朗の手に肉の感触は無かった。恐らく前腕部に何か仕込んでいるのだろう。スカートにスローイングナイフ、靴にスパイクなどを隠している時点で、ジャケットの前腕に硬い武器類を仕込んでいるのは推して知れることだった。

右手を痛めたのは、それへの備えを怠り、無遠慮に叩きつけてしまった廷兼朗の失態である。

しかし響も無傷とはいかないだろう。右手に返ってきた手応えは十分なものであった。上手く頭まで衝撃が徹っていれば、すぐに回復するダメージではない。

ここは一気呵成に攻め立てるのみ。そう意気込んで飛び出す廷兼朗の目が、この雑木林に似合わない金属の煌きを捉える。

起き上がり様、響の袖口が黒光りする銃身を吐き出し、間髪入れずハレーションのような白光で林の中を暴き立てる。

廷兼朗がさらに低まって、真横に飛び退く。その背中で弾丸が通り過ぎるのを感じながら、響の射線から外れよう外れようと体を流す。

いわゆる袖口銃スリーフガンというやつだろう。特殊な金具で小型の拳銃を保持し、それをレールに沿って掌まで導くという特殊なホルスターである。

コンシールド性の高いコルト・ベスト・ポケットが、廷兼朗を狙って弾丸を吐きつける。

創作の中ではよく見受けられるが、素面でこんなものを使うというのは、廷兼朗にはついていけないセンスだった。しかもそれは効果的に使いこなしているとなれば、完全に理解の外である。

そんなところより脇とか腰とか、他に納めるべきところがあるだろう。響のコンシールド性に対する飽くなき姿勢に感嘆しつつも、廷兼朗は着実に弾道を見切って間合いを詰めていく。

袖口に納められる程度の拳銃では、装弾数も命中率もたかが知れている。直接目の前で突きつけられでもない限り、脅威には感じない。

ほどなく袖口銃の装弾が尽き、かちかちと空しい機械音を立てる。それを合図に、廷兼朗は一直線に響へ向かう。

「たあっ！」

響が短い呼吸を吐いて、銃を手放した腕を振るう。またも袖口から飛び出したのは、細いワイヤーだった。

ピアノ線程度のそれを響は複雑に振り回し、廷兼朗の目の前に展開する。

地面を走り、草を断ち切るそれが、ばちばちとがなり立てている。

どうやら電流を漲らせているらしい。しかも木や草を難なく断ち切っているところから察するに、この上なく鋭利なようだ。

堪らず廷兼朗は下がり、一旦態勢を整える。ワイヤーが追ってこないところから窺うに、それほど長さはないようだ。

単にワイヤーを見切るだけならばそれほど苦にはならないが、電撃が曲者である。寸での見切りではむしろ通電し、電撃を被ることになるかも知れない。

しかしワイヤーを繰っている状態では他の武器を持つことが出来ないように、ひゆるひゆると音を立てながら響はワイヤーを振り回して威嚇するばかりだ。

廷兼朗は困ったようにちらと視線を周りに流す。

こういう手合いに、点での攻めは分が悪い。行うべきは面での攻め方。

痺れを切らせた響が、ワイヤーの結界を張りながら一步を踏みしめる。

その間に目的のものを見つけた廷兼朗は、それを土の中から掴み上げ、そのまま下手で放り投げた。

投げられたのはごろりと大きな石だった。片手では持て余しそうなそれが、速球よろしく一直線に響へと向かっていく。

ワイヤーの切れ味を鑑みれば、苦も無く断ち切れはするだろう。

しかし細いワイヤーでは、それだけの質量は持て余す。しかも狙いは過たず響の正中線。いかに避けようともどこかに当たる。

断じてから、響の行動は早かった。ワイヤーを繰って石を細切れにし、その振り下ろした腕の動きのまま腰へと伸ばし、新たに銃を取り出した。無論、袖口から伸びるワイヤーは邪魔となるため、緊急解除ボルトを発火して結合を解いてある。

断裁された石の欠片を浴びながら、視界の隅へと回り込もうとしている廷兼朗に向けて響が狙いをつける。

バックサイドヒップ・ホルスターから取り出したH&K P7が、

ヘッケラー・アンド・コッホ

すぐにでも銃口炎を吹く。

先ほどのコルト・ベスト・ポケットよりも明らかにバレルが長いそれを見て、廷兼朗の顔色が見るからに蒼ざめた。

木の陰へと逃げ込みながら、複雑に身を滑らせて逃げていく。弾丸の命中した幹が抉れ、白木の破片をばら撒く。

形勢が逆転したかと思われる展開だが、その実未だに膠着の体であつた。

響が銃器を持ち出すたびに廷兼朗は守勢に回るが、ただの一発たりともその体には届いていない。

その秘訣は、廷兼朗の目付けにある。

彼はただただ距離を開けようとしているのではなく、視線は響を捉えて離さないでいる。銃それ自体ではなく、響の体——正中線を具に観察している。

その歪み、動き、ズレから次の行動を予測し、弾道の検討をつけてそこから離れ、あるいは潜る。

また自身は力むことなく、なるべく正中線を崩さぬようにし、筋肉の踏ん張りではなく体重の傾きに追従させるようにして動いていく。

日本の武道で言うところの歩法『無足』。まるで足などついていないかのように、力みなく流麗な動作を可能とする。筋肉の踏ん張りも正中線の歪みも最小限に抑える移動は、次の行動が非常に読み難い。いつ何時動くかを伝えないのだから、相手は当てずっぽうの無謀な攻撃を強いられる。

まるで蛇のように、しゅるりゆると弾道から逃げていく廷兼朗を見て、響は倦厭の情を禁じ得なかった。

こちららも巧妙に挙動を隠して撃つてもいいのだが、そんな悠長なことをしていれば、たちまち間合いを詰められてしまう。それに、その一発で確実に仕留められるというわけでもない。心肺か脳組織を損傷せしめなければ、拳銃の小さな引き金を一度絞るだけの行為

が、致命の隙へと早変わりすることになる。

とはいえ、このままでは埒が開かない。むしろ弾薬を無駄にするだけだ。

響は即断するや、H&K P7の銃撃を止めた。

むしろ氣勢を削がれた形の廷兼朗が、訝しむような眼で響を見つめている。

響は右手に銃を握りながら無聊とばかりに燻らせ、銃口をだらしなく下へ向けている。

途端、廷兼朗の顔に凄みのある笑いが浮かんた。可笑しい面白いというよりは、今の響の行動に感心しているようだった。

見事に力みの抜けた、それでいて一本筋の通った立ち姿。廷兼朗の好きな類の正中線である。

それはどうやら、居合いに近い構えらしかった。

弾道に相手を捉えた瞬間、悉くを撃ち抜く姿勢。

元より射程と攻撃速度では、道具を使っている響に圧倒的な優位がある。その響に待ちに入られては、廷兼朗としては堪ったものではない。

じりと静かに、落ち葉を退かす程度に足を這わす。

このように頭のネジが外れているとしか思えない行為は、廷兼朗の好むところである。またそれに応えることも、廷兼朗の得意とするところだ。

まるで地雷原を歩むような、瀬戸際の心地。廷兼朗にとっては非常に慣れ親しんだものだ。これまで幾度も感じてきたものだ。

それにこの感覚は、自分だけのものではない。同じく自分と相對している響も感じてくれていることだろう。でなければ、こんな対応を見せてくれないはずだ。

半歩僅かに踏み込むたびに、そんな不埒な考えすら削られ、消え去っていく。それどころか雑木林も、足元に生える草も、入り組んで立つ木も、徐々に存在を希薄にさせていく。

ただ銃と、響と、廷兼朗だけの世界。その形を少しずつ狭めながら、二人は近づいていく。

響の力の入れ具合、抜け具合はまさに秀逸としか言いようが無く、廷兼朗の目付けをしてその隙を見出すには至らない。

弾幕を張られていた時のほうが、まだ対応は容易だった。弾道の明確なものを幾つも重ねられるより、弾道の知れぬほどの無為な一撃こそが怖い。

廷兼朗は単なる人間に過ぎない。ただの一発、直径9ミリほどの金属片が体内に侵入しただけで、甚大な被害を被る。

無論、銃を持ってこられた時点で、廷兼朗は銃撃を食らう覚悟は済ませてある。危険性では遠く及ばなくとも、引き換えにこちらの拳も届かせるくらいの気概が無ければ、弾丸の雨に身を晒すことは出来ない。

これまで活発に、目まぐるしく武器を持ち替えてきた響は、不気味に沈黙を守っている。

落ち葉を踏む音さえ慎ましかに抑え、廷兼朗はなおも間合いを潰していく。

踏み込む間合いが、さらに狭まる。先程の半分だけ、また先の半分だけと、いつまでたっても詰まらない。自分に最適な間合い――打つに易く、防ぐに易い場所を、数ミリ単位で調整していく。

廷兼朗が当たりをつけて、とうとう前進を止める。銃口の正面、目算で三メートルほど。

これ以上は進めず、これ以下退くわけにはいかない。まさに分水嶺と言わなければならない。優に一時間はかけたと思われる道程は、その実、十秒と掛かっていない。

距離の整った二人には、何の前触れも必要なかった。

廷兼朗が僅かに身を撓めた瞬間、H&KP7の銃口が鋭く跳ね上がった。

その銃身に合わせて、廷兼朗はさらに素早く身を低ませた。先程のタックルと同じ様相で、彼の背を弾丸が音を立てて過ぎ去っていく。

わずか9ミリほどの弾丸が起こす衝撃波で、廷兼朗の体が斜めに崩れる。直接食らったわけではないが、コーン状の衝撃波に煽られてしまう。

しかし、銃撃は外した、その時点で響の脰は目の前。少し手を伸ばせば、股間か大腿の急所を一撃できる。

一応は蹴りに備えて腕を前に置く。しかし動く様子はない。

刹那、廷兼朗の右の耳から肩にかけて、雪を投げかけられたように冷え冷えと血圧が低まった。

直感のままに廷兼朗は右の腕刀を跳ね上げた。それは幸いにも空かされること無く、上から降りかかる何かに押さえつけられた。

遅れて目を配れば、ぎらりと銀光を放つものがある。生のまま削り出された金属の香り。鋭く冷たく肉を割って入り込む、刃の香り。刃背に鋸歯セレーションを施された意匠は、それがサバイバルナイフの類であることを容易に想像させた。

完全に意識の外からの攻撃を受けて、廷兼朗は感じた冷えから立ち直るのに精一杯だった。

廷兼朗の意識は、完全にH&K P7に集中していた。そこへ全く警戒されていなかった左からの一撃。研ぎ澄まされた直感によって何とか致命打は避けたものの、不安定な姿勢で受けたために動きを制されてしまった。

まずい。この状況は確実にまずい。こんな隙を、目の前の少女が逃すはずが無い。そういう類の信頼は、既に廷兼朗の中で培われている。

ならばこちらにも、応えねばならない。元よりこの切迫の間。やれることは限られている。

銃口がこちらを向くより早く、廷兼朗は抑えていた響の左腕に自

分の右手を絡め、ぐんと押し上げた。

ただそれだけの僅かな挙動で、持ち上がった肩が響の upper body を起こし、すぐさま腰が浮く。そのため重心が不安定となり、右手の H & K P 7 の狙いがタイトになった。

いわゆる合気上げの術理。相手の重心を崩すことで制する妙技である。

それでもなお響はトリガーを引き、致命打を食らわせようとする。しかし揺らいだ態勢では H & K P 7 の衝撃を押さえ切れず、バレルが跳ね上がって暴れてしまう。

二発三発と重ねられた弾丸が、廷兼朗の体へ向けられる。しかし彼は目もくれずさらに半歩、響へと踏み込んだ。

弾丸は左の大腿と膝の肉を掠め、赤々とした血を撒いた。とはいえ直撃ではない。それを思えば悪い負傷ではないだろう。そんな傷は見るまでもない。見たところで治らない。

これ以上傷を広げたくなければ、その元を断つより他は無い。

「おお！」

小柄な響を上目遣いに見上げ、狙いを定める。踏み込んだ左足からなお血を噴き出しながら、左掌底で水月を掬い上げる。

まるで胸郭を引き剥がすように、深々と廷兼朗の左掌底が響の腹部を抉り、横隔膜を突き上げた。

「げはあっ」

内臓を突き上げられ、こみ上げてくる内容物を響が吐き散らす。体をくの字に折り曲げて、響の体が完全に浮く。少女を片手で持ち上げたまま、廷兼朗は衝撃を余すところ無く伝えるべく残心する。しかしながら、会心の手応えには程遠い。肉とは違う堅い感触は、恐らく仕込まれていた武器の類だろう。それに邪魔されて、どの程度衝撃が徹ったのかが知れない。

しかし彼女の消耗の程を窺えば、決着に相応しい打突だろう。出来ればこの辺りで手打ちとしたいものだ、廷兼朗は感じていた。

これ以上を続ければ、確実にどちらかが命を落とす。とはいえそれは、響のことを慮ってのことではない。それが自分かもしれないという確信が、廷兼朗に決着を薦めている。

そんな半端な親切心など、自分こそが最初に跳ね付けたというのに――

動かない響を漸う降ろそうかと廷兼朗が力を抜きかけたそのとき、額にごりつと、熱い鉄が打ち付けられる。

今しがた弾丸を吐き、バレルの熱く焼けたH&K P7が、廷兼朗に押し付けられている。

涎と胃酸で汚れた口を拭きもせず、響が片目だけ動かして覗き込んでいる。

そこにはもはや、幸薄そうな少女の雰囲気など微塵も無い。その威容は、食らい食らわれる世界に身を置く、獣に近い獰猛。己の腹を食い破られようと、敵の頭を噛み砕く牙獣の本性。

もはや一刻の猶予も無い。廷兼朗の寸勁が早いか、響のトリガーが早いか、二つに一つである。

誤魔化しの利かないくらいに、互いの命を握り合う。誇張されているようで、これ以上ないほど単純化された闘争。

これこそが闘いだ。これこそが廷兼朗の求めていたものだ。こういうことがしたくて、自分は得体の知れない手紙に誘われて、このことやってきたのだ。

廷兼朗と響の気が、沸々と高まっていく。だが仕掛ける機を見出すには至らない。

逆に言えば、僅かな綻びをきっかけにして崩れる程度の、ほんのささやかな拮抗だった。

そんな今にも破裂しそうな二人の肩に、ふわりと何か落ちてきた。

当然、その落ちてきたものが何かを判ずるまでもなく、廷兼朗は

足裏から発生させた力を腰、肩を通して増幅し、寸分も動かずに掌へと伝達する。

響もまた右の人差し指を絞り込み、H&K P7から弾丸を発射する。

その二つを被ったのは、一人の人間だった。

「タイムアップだ、ご兩人」

悠然と二人の間に立つ男は、右腕で廷兼朗を後ろへ押し遣り、左手で響の銃を真上に差し向けていた。

今さらになって、宙に浮いていた響の体がすっと地面に落ちる。一体いつ、どうやって現れたのか。響にも廷兼朗にも見当が付かなかった。

二人して状況がいまいち掴めず途方にくれていると、その様を楽しんでいるのか、男は何とも好々爺とした顔で頷いている。

「中々に楽しめた。今後ともよろしく頼むよ、お二人さん」

訳の分からぬことをのたまった男は、きゅうつと窄めた指を弾き、それを大きく打ち鳴らした。

ただそれだけのことで、まるで手品か何かのように、廷兼朗の意識は瞬時に暗転した。

体が平衡を失い、急速に倒れていく視野の片隅で、響も自分と同じように傾いでいくのが垣間見えた。

気づけば廷兼朗は、山の入り口で立ち尽くしていた。思えばこの辺りから地図の見方が途端に分からなくなり、迷い込んでしまったのだった。

体の調子確かめようとして、廷兼朗は言葉を失った。太腿や膝にあった銃創が跡形も無く消え去っている。言わずもがな、痛めた右腕も何ら支障が無くなっている。

かつて超自然の怪異を目の当たりにしたことはあったが、これ

ほど明瞭でいて不可解なものは廷兼朗にとって初めてだった。

狐に抓まれるどころの騒ぎではない。異界に誘われたような不思議な体験。夢現の狭間に押し込められたような――

しかし、廷兼朗は覚えている。あの響礼奈という少女を。彼女が放ったナイフの速さを。振るったワイヤーの切れ味を。狙いをつける銃口の精妙さを。打たれながらも撃たんとする執念を。

奇怪なる現象のなかで、それだけは確かに廷兼朗に残っている。全て余すところなく、覚えている。

「今後とも、と言っていたなあ」

男の台詞を反芻し、廷兼朗は口の端を僅かに釣り上げる。まるでこんな素敵な体験が、また巡ってくるかのような言い様であった。

ならば待とうと、廷兼朗は考えていた。またこんな素敵な体験をさせてもらえるのなら、この程度の怪異など十分に許容できる。

ただ次があるとすれば、別れを告げるくらいの時間が欲しいものだとも、廷兼朗は思っていた。

（後書き）

響礼奈さん、ありがとうございました。そしてクロワッサンさん、ありがとうございました。

そして最後まで読んでいただけた方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0560s/>

銃と拳 【第一回 戦闘シーンを書こう】

2011年3月31日07時10分発行